

第2版によせて

『質的調査の方法』（第1版）は2010年2月に刊行されました。思いのほか多くの方に読んでいただいて、うれしく思っています。第2版を出すにあたって、じっくり読み直してみたのですが、執筆してくださった先生方がご自身の経験からつかんだ「コツ」を惜しげもなく披露してくださっていることに、あらためておどろきました。また、若い時の経験は「エバーグリーン」であることもよくわかりました。

この間、社会においていろいろな変化がありました。みなさんにとって身近なことといえば、スマホの普及と、それを使ってより「手軽に」人や情報とつながれるようになったことではないでしょうか。その環境の変化を意識した新しい章を第2版に入れたいと考え、思いついたのが、正反対のようですが「雑誌分析法」と「アクションリサーチ法」です。

「ネット」が得意なみなさんにとったら、雑誌など「古くさい」媒体でしかないでしょう。しかし、雑誌を使ってレポートや卒論を書く学生は、常に一定数存在します。ネットとは趣を異にする魅力、時代の空気に触れることができるからでしょうか、その学生たちはとても楽しそうにみえます。もうひとつのアクションリサーチは、調査の方法であると同時に、調査の「姿勢」でもあります。さまざまな調査法を組み合わせ実践は「手軽」とは対極にあり、「めんどくさい」ともいえるでしょう。しかし、そのめんどくささをとおしてつかんだものは、必ずあなたに大きな気づきを与えてくれるはずです。

——というように、少々手前みそになりますが、意義のある改訂ができたのではないかと考えています。

第1版で「質的調査のおもしろさや楽しさを、みなさんと共有することができたら、とてもうれしく思います」と書きました。その気持ちは変わりません。

はじめに

—— この本を手にとってくれた学生のみなさんへ ——

現在は「社会学の時代」ともいわれます。格差社会、インターネットやケータイ（携帯電話）、若者の生態など、世の中で話題になることがらには社会学に關係するものがとても多くあります。社会のリアリティが捉えにくくなっているためか、その分析に「社会学的なもの見方」が使われることが増えているのかもしれない。

しかし、社会学を学ぶ学生のみなさんは「社会学のおもしろさってどこ？」とよくいっています。世の中の現象をはっきりさせるために使われる社会学は、どうもみなさんにとってはほんやりとしたもののようです。

社会学のおもしろさのひとつは、日常生活が対象になるところではないでしょうか。断るまでもありませんが、日常生活とは、自分だけ、あるいは自分と友だちだけがおくるものではないでしょう。さまざまな人たちがおくっているものです。もちろん、法律学や経済学など他の学問もそうだと思いますが、日常生活を対象とすることが最もあてはまるのが、社会学ではないでしょうか。そして、そういう社会学のおもしろさを体感できるのが社会調査のおもしろさではないでしょうか。

このようなことを私たち教員は伝えたいと思っています。しかし、「社会学のおもしろさ」「社会調査のおもしろさ」をみなさんに伝えることは、なかなか難しいことです。おもしろさをうまく伝えられないだけでなく、私は、半分冗談、半分本気で「友だちと遊ぶのをやめると、社会学のおもしろさがわかるようになるかも」といって、学生たちからいやな顔をされたりします。若い人たちにとっては友だちがすべてであり、あたかもそれが「社会」であるかのようです。友だち以外の関係を知らないようにみえるため、おせっかいをやってしまうのですが、そういうことをいう私にも、親しくなってくると、学生たちは友だちのように接してきます。

社会学者の宮台真司は「仲間以外はみな風景」という言葉を使って、若い人

たちにとっては友だち以外の人は目に入らず、それはあたかも風景であるかのような存在になっていることをあらわしました¹⁾。これは、若い人たちの他者認識がそれまでのものとは違ってきていることをいち早く捉えた言葉だったように思います。

それまでの他者認識については、今から30年ほど前に社会心理学者の井上忠司が述べたものがあります。井上は私たちの生活空間は、ミウチ・ナカマウチ / セケン / タニン・ヨソのヒト、という3つの同心円からなっており、「セケンとはいえば、両者（筆者注：『ミウチ・ナカマウチ』と『タニン・ヨソのヒト』）の中間帯にあって私たちの行動のよりどころとなる『準拠集団』なのである」としています²⁾。また、井上は近年の状況についても指摘し、「セケン」が「タニン・ヨソノヒト」や「ミウチ・ナカマウチ」の領域へと浸透し、それらの境界があいまいになってきていると述べています。とくに、若者においては、「ナカマウチ」こそがあたかも「セケン」の一部であるかのような観を呈している、と述べていますが、人びとの意識をあらわしたこの言葉は、実態をあらわした先の宮台の言葉と重なってくるところがあるように思います。

そういう学生のみなさんも、いつまでもその地位に居続けるわけにはいきません。少し奇妙な言葉ですが、「社会人になる」ということをしなければならなくなります。それは「就職」とほぼ同じ意味として使われていますが、そこでみなさんは、いまさらながらですが、社会には友だち関係以外の関係が存在することに気がつくようです。

以上のような点から考えてみると、社会調査は、ある意味で「社会人になる」、さらにいうと「大人になる」ためのとてもいいレッスンになるかもしれません。ここであえて、「社会人になる」を「大人になる」といいかえたのは、「学校集団から職場集団への移行」以上の意味を少し含ませたいと考えたからです。「大人になる」と聞くと、「分別くさくなる」と思う人がいるかもしれませんが、本来、「大人になる」とはそういうことをいうのではないでしょう。社会学でいう「社会的存在としての人間」ということを、自分のこととしても理解できるようになることをいう、と考えてもいいように思います。そうだとすると、社会には自分と友だち以外の人も存在することを身をもって知り、その人たちの行動、活動、表現、意識、組織、集団などを調べ、それらをとおして

自分自身の存在についても考えることになる社会調査は、その格好の機会となるのではないのでしょうか。

ここまで述べてきたことは、質的調査と量的調査のどちらにも同じようにあてはまるでしょう。しかし、質的調査と量的調査とでは、みなさんの「反応」は大きく違ってきます。数字を使うことになる量的調査のほうが、よくない反応をするように思われがちですが、実際はそうでもありません。量的調査の授業において出される課題には、みなさんはそつなく対応するようにみえます。一方、質的調査の授業での課題に対しては、「何をしたらいいのですか」「どうしたらいいのですか」という質問をよく受けます。「決められたことをやっておわり」とは少し様子が異なるためか、何をどうしたらいいのかわからず困ってしまい、そのような質問をするのでしょうか。それをいう人にまったく悪気はありません。素直に思い、素直にいつているのでしょうか。

この本は、そういう質問をするみなさんに、実際の方法を具体的に示すことで、「質的調査」のおもしろさや楽しさを伝えたいと思ってつくったものです。

みなさんがこの本を手にとってくれた理由は、「授業のテキストだったから」「先生にすすめられたから」「本屋さんでたまたまみかけたから」など、いろいろあると思います。理由はどのようなものであっても、質的調査のおもしろさや楽しさを、みなさんと共有することができたら、とてもうれしく思います。

工藤 保則

- 1) 宮台真司 1996「郊外化と近代の成熟」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉 編『セクシャリティの社会学（講座現代社会学10）』岩波書店
- 2) 井上忠司 1977『世間体の構造』日本放送出版協会、91頁。なお、近年の状況については、同書の文庫版（2007、講談社学術文庫）の「学術文庫あとがき——補遺にかえて」において記されている（267頁）。